

出生性と被投性をめぐる政治と倫理

森川輝一（京都大学）

（要旨）西欧哲学の形而上学的伝統を解体するとともに、現代大衆社会を根底から批判して、人間の本来のあり方を探求するハイデガーとアーレント。だが、「死」に臨む「自己」の本来性を公共空間に対置する前者に対し、後者は「出生」に人間の複数性の始まり（原理）を求め、自由な公共空間の構成をめざす。その理路を追跡しつつ、アーレントの出生概念と生殖との関係を考察し、実は生殖を前提とせざるをえない「政治」という営みが孕む無気味さを、存在への開けに住まうハイデガーの「倫理」の眼差しから逆照射してみたいと思う。

1. アーレントによるハイデガーの「被投性」批判：もしそうなら、「私たちは大地の上に投げ込まれた動物にすぎぬ…人間は世界に、投げ込まれるのではなく、導かれるのである」（55年8月のノート）。「人間は死ななければならないが、死ぬためにはではなく、何か新しいことを始めるために生まれて来るのだ」（『活動的生』44節）——だが、この「始めるために um anzufangen」は、何に基づくのか（私たちは何に「導かれる」のか）？

2. 生殖と出生：「非本来的な世人／本来的（共同）現存在」という『存在と時間』のシェーマの、アーレント的展開。全体主義研究を経て、「世人＝大衆」を、「労働する動物 animal laborans」として捉え直す。そこにおけるハイデガーの大きな影響と、アーレント独自の出生概念の生成。

(2-1) ハイデガーによる、人間を駆り立てる「ゲシュテル」の洞察、また、「すべてが労働の素材として現れてくる」近代労働社会の形而上学的本質を見抜いたマルクスへの高い評価（『ヒューマニズム書簡』）。これを、「労働／制作」という独自の行為概念により、分節化するアーレント。すなわち、世界を造り出す「制作」と、大地（自然）に従属する「労働」とを分け、後者の「不自然な成長」に、資本と技術の膨張過程に万人が「労働する動物」として隷属するゆえんを見出し、そこからのいわば脱自態として、「活動」と「出生性」に着目。

(2-2) 人間の誕生は、労働という「自然との物質的新陳代謝」（マルクス）から見れば、生命過程に従属する「労働する動物」の再生産（生殖）に過ぎない。対して出生とは、新たな人格が人々の間に現れ、新たな生の運動が始まるという出来事（Ereginis）。新しく生まれ出た者として、新しいことを始め、世界を変えてゆく活動者たち。

(2-3) 労働と活動、動物的生と人間的生を鋭く対立させるアーレント。自然に従う動物でありながら、法の統べる国を打ち建て、自らの動物性を克服する。しかしそれは、大地を故郷としながら大地に安らうことなき、「無気味な」人間の暴力性の露呈ではないのか（『形而上学入門』）。アーレント自身、何かを始める人間の危うさを強調する——そも、「始めるために」生まれるというが、その「のために um-zu」は何に基づくのか？

3. 政治の基底、或いは無底：「始めるために」は哲学的に正当化し得ず、信仰に属する事柄。遺稿『意志』まで続く、「始まりが存在せんがために人間は創られた」というアウグスティヌス、キリスト教の人間理解への依拠。

(3-1) 「出生」の物質的基盤としての「生殖」：後者を欠いて前者はあり得ず、活動による人間世界の構成もまた、生殖による新たな人間の再生産を前提とする。始めるために人は生まれる、というアーレント的政治の原理は、私たちの世界を続けるために新たな子を生まねばならない、という駆り立ての論理と表裏なのではないか。世界の存続に関わるかぎり、あらゆる政治は、生殖を神聖視する未来主義から逃れえないのではないか（cf. Lee Edelman, *No Future*）。翻って、いかなる um-zu にも汲みつくされることのない「ある」ことの実在性、一切の存在者的な役割や目的の無化のうちに露わとなる存在の真理に聴き従うのが、ハイデガーの道ではないか。

(3-2) アーレントが哲学と政治の区別に拘り、「政治理論家」を自称し続けたゆえん：政治は世界の存続（人間の出生／生殖）を前提とし、この前提自体は「信仰 Glaube」に属する（私たちは単に投げ込まれたのではなく、世界を続けるために導かれた（創られた）、と信ずる）。他方で、かかる信仰が糊塗する実在性、理由も目的もなく世界にあるという被投性を直視するハイデガーの倫理は、私たちが生まれて来ることについて、生殖しなければ政治どころか哲学も死に絶えてしまう、という自明の事実について、何を語りうるのだろうか。